「だから、

バイバイ。」

2012/06/23

あの日の選択は正しかった。
そうでなければ、どうして、私たちは別れなければいけなかったのか。

『涙の話』

廊下で妹子と出くわしたとき、ぎこちなく感情が動き出すのを感じた。
そういえばここのところずっと、心を使うことを忘れていた。だから今どのあたりが鈍く痛んだのか定かでない。
ずっと頭を使っていたような気がする。実務に実務を重ねてまた実務。そうだすべて実際の責務なのだ。書類を裁くのも馬子さんと話をするのも食事も睡眠も何もかも。
ずっと理詰めで動いていたような気がする。でも何もせずに日がな一日ぼうっとたたずんでいたような気がする。
今までのことは、ちょっと、霞がかったようで何ひとつうまく思い出せる気がしなかった。
ただ体の奥底、仕舞い込んだどこかで、ぎしぎし、心が居場所を主張している。

お久しぶりですと妹子は言った。ひどく抑制された声だった。妹子の声ってこんなんだったかな、と思う。お前が妹子の何を知っているのだと詰る声も聞いた。全くもってその通りだ。だって違和感を持ちながらも、どこがどう違うのか子細に指摘することはできないのだから。羅列することはできそうにない、それは、私は妹子の普段の声を知らないからだった。
知らないはずはなかったのに、もう、すっかり忘れているようだ。何もわからない。思い出そうとすると頭の中が白く

なる。
空っぽでそこには、何も残されていないようだった。
仕方なく、他に思いつかなかったから、私は笑う。

妹子とこんなところで会うなんて思っていなかったのだ。それは予測不能の、突発的な事故みたいなものだった。どうして妹子がこんなところをふつうに歩けるのだろか疑問に思う。
だけどすぐ、理解する。似合わない冠の色にその意味を読みとる。
その承認を下したのは自分だった。
そんなことさえようやく思い出すような有様だ。苦々しく思う、感情と実務を切り離すからこういうことが起きる。合理を優先して都合を忘れていた。
忘れていたはずのことをこうもあっさりと思い出すのだから、本当、何もかもが嫌になる。
おめでとうが乾いた口内を荒らしてまろびでる。ざりざりと内側のやわらかい粘膜をえぐるような気がする。気がするだけで当然、舌でつついても何もない。かわりにこっそり奥歯を立てて噛むだけだ。
噛みしめて、それ以上何も言わないようにこの時間をやり過ごすだけ。

ええ、おかげさまですよ、と妹子は軽く頭を下げた。
その裏を私は読みたくなくって、言葉をつなぐ。

「謙遜するなよ、実力だろ？」
「運が良かっただけです。どこぞのお偉い様の子守もして上からの覚えも良かったですし」
「へえ？　誰だろうね？　今度私にも紹介しろよ」
「嫌です。また面倒に巻き込まれるのは御免です」

吐き捨てるような言葉がじくじく私をかき乱すから、うっそり笑う。
形ばかりの祝いの言葉とそこに続く白々したやりとり。
潜む棘には気付かぬふりで。

それなのに君が、ほじくり返すから。

「そういえば……最近天気がいいですけど、どこか、行きましたか？」
「……ああ、うん」

それは、

「もういいんだ」

妹子が瞬いた。
なんだか懐かしいような気がして私は自由にさせていた感情を切り離す。
離脱したい、と切に望む。ここにいたくない。もうこれ以上ここにいたくない。
何か気付かない方がいいことがみえて仕舞うような気がする。
端的に言うと怖い。嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ。
早く。
ここを去りたくて何か別のもので頭の中を散らかそうとする。次の予定。何だ、何だ何だっけ。努めて思考を他所にやる。目の前の男を切り離す。
切り離そうと努力する。
思考が乱れていた。限界だった。限界があるだなんて知りもしなかった。迂闊だ。いつも冷静な自分が鳴りを潜めて頭の中が騒がしい。
もうやめた。
遊びに行くのはもう止めたのだって妹子が。妹子がいない君がいないからひとりだからひとり、じゃない、ないけどでも妹子じゃないからなんだか前ほど楽しいことがあるように思えなくって前みたいに楽しいことを探すようなきにもなれないだってせっかく見つけてもまたこうやってなくなっちゃうかもしれないから手放さなくっちゃいけなくなるかも、かもしれないだから、だから。
だからもう。

「もう、やめたんだ」

君がいっしょじゃなくっちゃ意味がない。
そんなことだて君と別れるまで、知りもしなかったけど。

切り離す決意をする。
したからもう妹子の顔も見ずに横をすり抜ける。
すり抜けようと私はした。
できなかった。

突然腕をひかれたから。

息をのむ。もう顔も見ないと決めたのに振り返ってしまっている。それは予想外、予測不能の突発事故。きっとそう。
張り付けた薄ら笑いがぽろぽろ剥がれて、簡単に裸にむかれて仕舞う。
振り払うことはできなかった。妹子が怖かった。まるで今すぐにでも殴り掛からんとするような、襟元でも掴み締め上げるような表情でそこにいる。
何かを堪えるような、苛立ちを噴き出させる寸前の様な泣

き出す寸前の子供のような。
そのくせくたびれ果てた老人のように、しわを刻むほど顔を歪め、腕をつかむ力を強くされる。
丸く整えた爪の形がありありわかる。ぬるく食い込み痕になるようだ。顔が歪む。頭と心が同時に痛む。共鳴して共感してひどい有様だ。
響いて響いて、もう、どちらの痛みかわからない。
体か、心か。
表面かそれともその中身か。
痛い。
痛ましいものでも見るように悼むように、私を睨む妹子の口が開かれる。

「これだけは覚えとけ」

低く、唸るような命令で。
喉奥から絞り出すような声で。

「何遍あんたに嫌われたって、僕はまた、片想いに戻るだけだ！」

ぽかんとした。するしかなかった。何を言ってるかよくわかんなかった。わかりたくなかった。
ぼうっとしたまま動けないでいたら突き飛ばすように、突然腕を放された。
いつも自然に、呼吸するようにぴたりと張り付けられる嘘が見当たらない。
吹き飛ばされてしまったように、取り繕えなくて立ち尽くす。
それこそ呼吸の仕方まで奪い去られてしまったように、肺のあたりが苦しかった。
私を睨みつけた妹子はそのまま、荒い足取りで行ってしまう。
私ひとり取り残されて、どれだけそこにいたかわからない。
唐突に、笑いがこみ上げてきて片手で瞼の上を覆った。
明るさが遮られて暗くなる。

「は、はは、ははははは……」

笑う。笑う、笑う。笑う。
乾いている。それが湿っていく。
指の間から伝い落ちて、ぱたぱた、足元に雫が降る。
それが自分のものだと気付いて余計いたたまれなくなった。
もう片腕で自分をかばう。
かばうように抱きしめるように体にまわして、ぶつかるように壁にもたれた。
それでも留められない雫が足元を濡らすから、もう一歩も、どこにも行けないような気になってくる。
もう立っているのもやになって、ずるずるとその場にうず

くまった。
何がこんなに堪らないのかが分からない。
何で泣くのかわからない。
それでも涙はしたしたと頬と掌を濡らすから、私はもうだめなんだと思う。
横目で見やる外は明るい、明るいのに、私は一人で暗いところに立っている。
すぐそばではこの世に悲しいことなど何もないとでも歌ように風が吹くのに、そこにたどり着くことなんて出来ない気がする。
ますます身を縮めて動けない。

こんな無様なところを、本心ではあの子に見つけてほしくって、救い上げてほしいのだと思い当たって死にたくなった。

「きっとの仮定で語る愛」

2012/07/21

夢は見ない、なんていう、下らない雑談に交えた陳腐な自尊を。
もしも、見抜いてもらえたら。

『夢の話』

昔から空気を読まない人だとは思っていたけどこれほどとは。
あきれだか感心だかわからない思いで顔を上げれば、予想通り、何も考えてないような空白の表情でいるのだった。
まるで心にもないような顔して言うものだから、一瞬、僕の中にも空白が生まれる。
せめてそこに何らかの表情があればまた、少しでも、違っただろうか。
わからないが突然そんな話をして、萎えたらどうしてくれるんだと思う。

「やめたら？　そんな、無理にすることないんじゃない？」
「やめたいってことですか」
「あ、今、怒った」
「怒ってません」
「うそ、なんか今、ここ、ぎゅってしわ入ったし」

太子がおっくうそうにのろりと腕を持ち上げた。手を伸ばして指で、眉間を押すように触れる。
振り払いたくて、もう相手にもしたくなくって身を屈める。
肌蹴られた、薄い胸元に舌を這わせた。

「っ、ふ、んん……」

ぷつりと立ち上がってきたそこを執拗にぬらす。舌先をとがらせてこつこつとつつけば甘い吐息が聞けるから、まんざらでもないじゃないかと意地悪く思う。
簡単なことだった。どうせどんな詭弁を立てようともしたいことをするだけなのだ。
ただ夢中な振りをして肌に触れていく。肘のあたりにわだかまって引っかかったジャージが邪魔そうだとは思う。でもそのままでもいいかと思ってしまう。他に身体の下に敷いてやれそうなものがないから、ちょうどいいような気もしていた。もう片側の尖りを指でつまんだり押したりして弄る。確定的な刺激ではないにしろ、むずむずと腰をよじらせるのが可笑しかった。腰をこちらに押し付けるように浮かせる動きを読んで、わざと避ける。
そのままぐりぐりと、先っぽをいじめていると、う、と泣きそうな声がした。

「しつこ、い」

でも好きですよね。
好きでしょう、と、声に出さずに聞いてみる。
のかせようとしているのかそれとももっととねだるのか、ジャージに戒められて不自由な腕で、太子がくしゃくしゃと髪を乱すように頭を掴んでくるものだからもっとしつこくしてやった。
嬌声だか、悲鳴なのか。
声が聞ければなんでもいいような自分がいて、ゆるゆるとおかしさがこみあげてしまう。

「真っ赤だ」
「……っ、あ、も」
「もっと？」

れ、と舌を差しだして肌に唾液で線を引く。
胸元から、鎖骨まで。
途中音を立てて吸い付いて、後をつけながら首筋、顎。
いやいやをするように顔をそむけるから、唇はあきらめて逆に晒された耳たぶにやわく噛みついた。
ぶるり、と肩を震わせて、開けた口からため息を溢す。

「だって……」

ちろり、とこちらを見遣る瞳はいつもと同じだ。
どこか停滞した空気のような、腐り落ちそうに死んだ色。
吐き出す息は熱く色づきそうなのに。
瞳の色だけ、いつも通り沈んだままで。

「だって……ん、こ、んなこと、してたって、何にもならないじゃん……？」
「そうですね」

それが、いつものことのはずなのに。
なぜだろう。
どうしてか、今日ばかりは神経を騒がせた。
視線を落とす。少しだけ歯を立てていじめていた耳たぶが赤くなっている。
首筋には点々と赤い痕、それを、指で押して確かめるようにすると酷くしたいような衝動がわいて困るから、そのままするりと胸元を撫でた。
尖りきった先端を掠めるようにするとひくりと腹が動く、それをもっと確かめたくなってもっと手を下ろす。
するするとさわりの良い腹を撫で、脇腹をくすぐるようにたどっていて。

「や……もう、んっ」
「何？」
「も、じらす、なってば」

別に太子に睨まれてこわいだなんて思わない。
瞳の色はそのままだけど、ぎゅう、と情けなくしかめられた眉は確かに扇情的だった。
だからあおられてやることにした。
あからさまに刺激を欲してもぞりとよじる腰の動きを窘めるように、いきなりそこを握り込む。
もうとっくに中心は芯を持ち始めていて、二、三度手を上下させただけでだらだらと先走りをこぼしてなおさらいやらしい。
はああ、と大きく太子が息をつく、それが逆上せたみたいに震えている。
もっと鳴けばいいのに。
もっと感じればいい。
何にも考えられなくなってしまえ。
下らないつまらない。
聞きたくないこと。
他所事を、考える余裕など吹き飛ばしたくてかき消したくって奪いたくて手を動かして乱していく。

「……ただ、さあ。不思議だな、て、っ、思ったんだよ」

避けたい話題を誤魔化すのはこの際いっそ楽だった。
ただ身体の望むように、本能の命じるままに動けばいい。
ぬるぬると手を動かす。太子の声が耳に甘く響く。それに酔うようになおのこと手を激しくして一度吐き出させる。それでも休ませない、許さないでなお握る。
ぴん、と伸びた足が弛緩してまた緊張する。吐き出されたもので濡れた手で後ろをたどる。くるりと入口を一度なぞってやると喉の奥に引っかかるような短い悲鳴。でもそこはひくりと期待するように蠢いている。
指をあてがって、ひくりとまた誘うように震える動きに合わせて押しこむ。

初めは一本しか入らなかったそこが、収縮と弛緩を繰り返してすぐに二本三本と受け入れていくからばらばらに動かして中を擦ってやる。
反応がいいのは、この人は、本当は乱暴にされる方が好きだから。
それを承知でことさら丁寧に丁寧に、気持ち良さを引き延ばすように責める時もあるけれど。
今日はそんな余裕がない。
この人にも、そして、僕自身にも。

「うぁ、あ、ああ、ああああっ……！」
「……っ」

ぐい、と中に一気に押し入った。

「……力、抜いてください」
「や、あああっ、んっ、あっ、あ、」

聞こえてるのかいないのか。
見ると太子はぎゅっと目をつむって何を考えてるのかわからない。
ただ押し入ったそこはとんでもなく気持ちが良くって、奥歯を食いしばって気をやらないようにしばらく耐える。
ゆるゆると無意識なのか腰が揺れている。
こいつ、と一度苦々しい思いで眉をしかめて、突き上げた。
ぱらぱらと悲鳴みたいな声が降る。
それをずっと聞いていたくて、慎重に自分の呼吸を整えながらもいつもよりも乱暴に奥を狙ってまた突き上げる。
単純な動きでもぞわぞわと、鳥肌の立つような気持ち良さが押し寄せて、ともするとうめき声でも上げてしまいそうだ。
何度も何度も奥を突く。
組み敷いた身体の内側を、その粘膜の一番弱いところを、何度もなぞって確かめる。

「……っ……！！」

背中をぴんとそらせて、喘ぐ声さえ引きつらせて。
もう勢いのないものが吐き出されて太子自身の肌を汚す、見下ろしたそんな痴態にも欲情した。
快楽が加速するようで瞼の裏が白く焼ける。
押し寄せるような気持ちの良さにすべてを明け渡して、何か、伝えたかったことがあったはずなのに。
そのすべてを塗りつぶして、思う様その奥に射精した。

何かあたたかな夢を見ていた気がする。
僕と、あんたと。
まるで日向の。

目を覚ますと隣に、鼻先に、あんたが眠っていて何とも言えない気持ちになった。
素直に抱きしめたいと、閉じ込めてしまいたいと思ったけれども何もしない。
今少しでも動けば何かが崩れてしまう気がして。
具体的にはあんたが目を覚ましてしまう気がして、それにおびえた。
あんたが目を覚ましてしまえば、今、何かが変わってしまう気がする。
もちろんそんなことなどありえなくって、あんたが寝ても覚めたって、この世は何も変わらないし、例えばあんたと抱き合ったって、僕は僕で、あんたはあんただ。
何も変わらない。劇的なことなど何も起こり得ない。
すべては今までの積み重ねでしかなくって、そこに僕は今、少し、歪な欠片を放り込んでいるだけに過ぎない。
続けていればいつかはこれをきっかけに、僕の何かが崩れ変り果てるかもしれない。
でもそれはきっと今ではない。
今はまだ、今までの僕の延長線だ。
「好きですよ」

眠るあんたに問いかける。意味のない関係。どこにもつながらない関係。
それでも積み重ねるひとつの事柄。
あんたとの、時間が僕を作っていく。
この先の。
今はまだ、どこにも通じない僕らでも。
「だからあまり、僕を、悲しい気持ちにしないで」
わがままは言えない。
誰にも言えない。
だから最後までとっておく。
こうしてひとり、呟いて、誰も聞かない時間に溶かして消してしまうのだ。
全部なかったことにする。
今あんたが目を開けてもたちまち消せる程度の感傷だ。
くだらない。
つまらない。
もしかしたら僕自身聞きたくもない。
だけど僕自身の積み重ねを、あんたが目を覚ませば全てなかったことにして。
またいつもの僕らに戻っていく。
きっと服を着ればあんたは手の届かないほど尊い人で、僕は一介の役人だ。

それでもいい。
それがいい。

思えて繋いだ関係だから。

「好きですよ」

きっと。

悔やむことがどこにあるだろう。
眠るあなたに問いかけた。

「紙鳥の雨歌」

2012/08/18

戸の外側に音が鳴る。
ぴたんぴたんと雫が集まって落ちていく音。
ざあ。
ざあ。
ざあ。
と、
音。

雨の日にはこころが平たくなった。
ざらざらに乱れた気持ちでも、表面を冷たい湿度に浸されるように、思考に重たくふたをしめられるように、平たくなる。
雨音に意識が向けられるせいかもしれない。
他に何事も考えたくなくて。

せかせかと私を取り巻く世界のあらゆること。
あらゆる事象を、分析と分解と解釈に追われる、思考がようやく息をひそめる。

それは窒息する心地に似ている。
なるほど、雨が降る度に、私は私の思考を殺しているのだ。
と、思えばくすくす笑いもこぼしたくなる。
それをよろこぶようにして、くすくす、くつくつ、喉奥が笑うみたいに跳ねる度、気持ちはいやされて凪いでいく。

とろとろと眠る寸前のまどろみの中。
幼い日に沈んだ、池の底から見上げる風景。

私を連れてきたそいつは、開け放ちの窓から吹き込んだ雨で、ダメになった書類を前にがくりと肩を落とした。
それは窓さえ閉まっていれば、これから私が向き合わなければいけなかった案件だ。
あーあ、と私は言ったかもしれない。
それは心の中での出来事だったかもしれない。
ともあれ私を引っ張ってきた妹子は、手首をきつく掴む力をゆるめ、がっくりと肩を落としていた。
ゆるりと足を踏み出し戸に近寄ると、こん、と諦めにも近

い音で閉ざされる。
雨音は遠ざかるような、変わらないような。
部屋に満ちた湿度は立ち込めたまま、はあ、と妹子のため息が混ざった。
けれども妹子は、数秒後には何事もなかった顔でこちらを見て、手のひらを見せて軽く持ち上げてみせた。
それは参りました、と言っているようでもあり、もう用はありません、と突き放されているようでもあり。
表情が変わらないものだから、妹子が何も言わないものだから。
わからない私は、かくりと首を横に傾けたのだった。

せまい一室に湿度が満ちている。
そこに墨のにおいが混じり、私は書き損じの書類で鳥を作って遊んでいた。
追い出されはしなかった。
ここにいろとも言われなかった。
妹子は何も言わなかった。
妹子は何も言わないまま、ほんの少しだけ眉を下げて、唇を、なんとか笑みのかたちに見える程度に緩ませてみただけだった。
それからダメになった書類をわきに避け、棚から何も書かれていない紙を持ち出して広げ、向かったのだった。
私はその後ろ、ぺたんと座り込んでしばらくごろごろ寝転んでいた。
それにも飽きて、脇に寄せられた書類に手をのばしても妹子は何も言わなかった。
ちら、と視線くらいはくれたのかもしれない。
私だって妹子の背中側から、手だけのばして引き寄せたのだから見えなかった。
ただお叱りはなかったから、それを承諾と見なして千切って遊んだ。
縦と横、長さの合わない紙端を折って開いて折って。
ふたつの羽に似たものを形作る。
両側に均等に広げて、でも紙でできた鳥は羽ばたかない。
鳥の羽に似ても似つかないが、機能は同じだった。
すい、と私の手を離れ、流れるように空を滑る。
飛ぶとも違うが落ちるとも違う。
そうやって部屋を旋回して、すべり込むように床に着く。
それを眺め、いくつも折っては手放していく。
不思議だなあと。
おちもせず飛びもしないその鳥を、ひとつふたつと放ち続ける。
すい、と私の手を離れ。
音もなく空を滑り、床に着き。
みっつよっついつつむっつ。

ざあ、
ざあ、

ざあ、
ざあ。

じゅうにじゅうさんじゅうよん。

にじゅう、を数える。
私は妹子の後姿を見る。

妹子が好きだと思い出した。

それはちょうど私の手を離れた紙鳥が、机に向かう妹子の後ろ頭に刺さった時だった。
こつん、と紙鳥がぶつかった頭をゆっくり巡らせて、振り返る妹子の顔が怒っていた。
今にも怒鳴り散らしそうに鋭い目で私を見た時。

ああ、好きだ。
私は妹子が好きなんだ。

「好きだよ、妹子」
あるいは、
「好きにしていいよ」

どう誘ったのか、まったく覚えていなかった。
ただし結果として今、天井がほんの少しだけ、遠い。

後頭の床の感触は硬かった。
天井の手前にはひどく無表情な妹子の顔がある。
それが近付いてきたから、私はただ目を閉じた。
目をつむって、受け入れた。
受け入れることは得意だ。昔っから、いろんなものを飲み込んできた。
知識も感情も事情も憎しみも。
恐れも責務も役割も欲求も。

それらすべてが私には等しく映ったから。
等しく下らないものに思えたから。
望まれるままに、それらすべてを飲み込んできた。

自分から望んで、渇望して、受け入れようとしたのはもしかしたらこれが初めてなんじゃないかって。
思ったら、耳を塞ぐように聞こえていた雨音が途端に膨れ上がって気持ちを満たした。
内側から消えていきそうだと思った。
とろとろと体の中の方から、腐り落ちるように脆く崩れて溶けていきそうだ。
それはきっと、幸福なことに違いない。
そんな素敵な予感があって、だけど妹子の手のひらが無機的に私の表面をなぞるから。
私は、私のかたちを失えない。
また別のさいわいを、頭が描き出そうとして忙しい。
ああそんなところにもあったのかって、意外さに驚いてしまうくらい、いつもと違う部分が違う思考を持って動いている。
それはいっしょに熱を吐き出していて、だから溶けてしまうのだと私は思う。
その熱は、雨に冷やされることを羨みながら、同時にもっとと妹子を欲しがっている。

私は妹子を抱きしめようとして、首に腕を回して、その肩口のあたりに赤い痣があるのを見つけ出した。
妹子に身体を探られながら、じわじわと上がっていく呼吸を飲み込みながら、その赤い痕に、何度も触れてなぞって確かめてみる。
妹子は何も言わない。
何も言わず私の腕を受け入れて、私の輪郭をなぞり、溶け零れてしまいそうなのを留めながら。
何も言わず。
赤い痕に、触れられるときゅ、と目を細めた。

「ねえ……妹子ってさ、どこにいるの？」
私の体をなぞる動きをぴたりと止めて、妹子は、伏せていた目で真っ直ぐに私を見抜いた。
酷く凪いだ瞳をする。
今まで見たことないってくらい穏やかな顔。

静かに、

「どこにもいませんよ」

夕闇が裂けるような、夕立の前みたいにうっとり笑う妹子

を見て。
私は。
「好きだなあ……」
妹子の内側はもっと深くて複雑なんだって。
その複雑さを余さずに、飲み込んでみたくって。
もっと確かに確かめたくて。
妹子の体を抱き寄せて、近づく顔に目を閉じた。